

いけない大人たち サンプル

義之（ヤクザ若頭）×奈央（虐待故精神幼い）

圭吾（塾講師）×陸（フリーター）

「…………どうしたの？」

バイト先の店の裏。細い路地には閉店の片付けで出されたゴミ箱が三つ置かれている。その横に膝を抱えて座る少年。膝に顔を埋めているけれど、体格と服装からして未成年だろう。時刻はもう零時を過ぎている。未成年が歩いていて良い時間ではない。

それにひどく薄着なのも気になった。秋口と言えども夜は上着がないと寒くていられないのに、少年は長袖シャツ一枚なのだ。

「どうしたの？」

返事はない。まさか具合でも悪いのだろうか。怪我をしているのかも。

この辺りの治安は悪くない。だからこそこうして声をかけることができたのだが、悪い人が全くいないというわけではないのだ。

「君、」

近付いてそっと肩に触れるとようやく少年は顔を上げた。

「わ…………」

綺麗な子、というのが第一印象だった。けれどその目はひどく虚ろだった。まさか違法薬物なんてしていないだろうな、と思ったのは一瞬で、その目にはひどい孤独が感じられた。

「…………具合悪いの？」

「…………だいじょうぶ」

儂げな声はその美貌に似合っているけれど、心配になる。

「もう遅いよ。危ないよ」

「うん」

どうしたのだろうか。警察に送り届けた方がいいのだろうか。家出かもしれない。

「おうちに帰らないの？」

「…………うん」

じゃあ、家出だ。もし迷子ならそう言っただろう。

「警察、行く？」

「行かない」

では自分でできることは何もない。心配だなと思うものの、都会では他者に突っ込みすぎるのも良くないのだ。

「じゃあ、気を付けてね」

踵を返し、腕時計を見る。零時三十分。急いで帰らないと圭吾《けいご》が心配するだろう。電話をした方がいいだろうか、そう思いながら一歩踏み出した途端、身体が後ろにぶれた。振り返ると、少年が陸《りく》の上着の裾を掴んでいた。

「どうしたの？」

声を掛けるとその手が下りた。何か言いたいことがあるのだろうか。

しかししばらく待ってみても少年は口を開こうとはしない。仕方なく、再び正面を向いて歩き出す。今度は引き止められなかった。

しかし、足音がついてきていた。振り返る。やはり少年は後ろにいた。

「……行くところないの？」

少年は何も言わない。けれど縦るような目で陸を見つめている。

「……行くところないの？」

もう一度訊く。

「……うん」

そのとき陸の携帯が震えた。カバンから取り出し画面を見る。想像通り、恋人の圭吾だった。

「もしもし……」

『陸？ どうした』

「ごめんなさい、ちよつと……」

圭吾に訳を話すべきか悩む。この場で話せば必然的に少年にも声が聞こえてしまう。まさか知らない少年について来られて困っている、なんて本人の前では言えなかった。

「後で話します。ごめんなさい、また後で！」

返事を待たず携帯をカバンに戻す。

「うち、来る？」

「いいの？」

「うん、おいで」

どうしても少年の寂しげな目が心配だった。

「おかえり」

「ただいま」

玄関を開けると圭吾が心配そうな顔で待っていた。

「っ」

少年が陸の上着を掴む。怖いのだろう。

「あの、ごめんなさい圭吾さん、この子、拾ってきちゃった」

「……犬には見えないな」

「うん、人間……」

ちら、と上目遣いで圭吾を見ると、圭吾は仕方ないなといった様子で笑った。

「寒かっただろう。早く入れ」

「はい」

そのときになって少年が靴を履いていなかったことに気付き、タオルで拭いてからリビングに向かった。

「ほら」

「ありがとう」

圭吾が作ってくれたミルクココアを受け取り、一口。温かい。

「……君も」

少年は圭吾から同じくカップを受け取ったものの、口にしてもいいのか悩んでいるようだった。

「美味しいよ」

そう陸が言うと、少年は安心したようにカップに口をつけた。その様子は圭吾を警戒しているというよりも陸に懐いているといった風だ。

「僕は陸。彼は圭吾さん。君は？」

「……奈央《なお》」

「奈央くんか。よろしくね」

圭吾は何も言わず、静かにコーヒーを飲んでいる。きつと一先ず傍観することに決めたのだろう。

「陸」

少年が口を開いた。

「うん？」

いきなり呼び捨てとは驚いた。けれどこの子は違和感がない。凶々しさが無いのだ。例えば敬語が使えない外国人みたいな。悪気が無いのが伝わってくる。

「ありがとう」

純粋な笑顔だった。まるで子供のような笑顔。遠慮や躊躇いのない無邪気な笑顔。

「どういたしまして」

でも一体こんな時間にあんなところでどうしたのだろう。

「奈央くんはどうしてあそこにいたの？」

「逃げてきたの」

「どこから？」

「おうち」

「おうちの人と喧嘩したの？」

この子は何歳なのだろう。話し方がとても拙い。まるで本当に子供のようだ。

「逃げろって言われたから」

逃げろと言われるとは、虐待だろうか。父親からのDVで母親が逃げろと言ったとか——気になるけれど、この話し方を見ているとしっかりと説明できそうな気がしなかった。

「……そう。奈央くんはいくつ？」

「にじゅう……」

奈央はカップを置いて両手を広げた。そして指を折る。

「二十三歳」

まさか、と思った。自分より年上だったとは。でもその様子は完全に幼児のそれだった。

「そうなんだ。でもおうちの人が心配しているかもしれないよ。おうちの電話番号、分かる？」

「わかんない」

そう言ったけれど、奈央はポケットから紙を取り出した。一緒に小銭が数枚落ちる。けれど奈央は気にしない。

手渡された紙を開くとそこには数字が並んでいた。市外局番があったので固定電話だろう。紙を渡すと圭吾が携帯に打ち込んだ。そして耳に当てる。

「奈央くんはいつも何をしているの？」

「おうちにいる」

「おうちで何をしているの？」

なんとなく、圭吾の電話を聞かせたくなかった。

「ええと、車で遊んだり、お絵かきしたり」

「そうなんだ。どんな車が好き？」

「パトカー！」

「ああ、パトカーかっこいいよね」

「うん！」

奈央は完全に子供だった。とても素直で可愛らしい子供。

「ビーポービーポー」

「ん？ それは救急車じゃない？」

「パトカー」

パトカーと言いつつ、ビーポービーポーと楽しそうに繰り返している。その様子と、「逃げる」と言われたという言葉を結びつけると思いつくのは一つだけだった。

「……陸」

「は？」

「……今日はもう遅い。寝かした方がいいだろう。布団を用意してくるよ」

「すみません」

圭吾は陸の八つ上の二十八歳だ。知り合ったのは予備校。大学受験のときに先生をしていたのだ。

圭吾は優しい先生だった。親と折り合いの悪い陸をいつも心配してくれて、授業のない日も補講ということになって呼び出し、家に居ないで済むようにしてくれたのだ。それから受験の終了を機に告白して、今に至る。

卒業と同時に家を出る条件として大学進学はできなかったけれど、後悔はない。二年間アルバイトで金を貯めて、来年の春からもう一度受験勉強をして大学に行くのだ。

圭吾は大学費用を出してくれると言っただけだけどそれは丁重にお断りをした。とてもありがたかったけれど、こうして一緒に住み、生活費を面倒見てもらっているだけで十分だ。もちろん食費とかはなるべく出すようにしているけれど、本当にありがたい。甘えっぱなしの家賃は大学に入学してまたバイトをするようになったら少しずつ返していこうと思っている。

「シャワー、浴びる？」

「や」

「そっか、じゃあ僕ちよつと浴びてくるね。すぐに戻るから」

立ち上がり、浴室に向おうとしたところで服を引かれた。振り向く。やはり。

「一人、怖い？」

やはり奈央は何も言わなかった。もしかしたら今夜は一緒に寝ることになるかもしれないな、という予感当たってしまった。

「おやすみ」

「おやすみ」

圭吾が敷いてくれた来客用の布団に二人で寝転がる。この部屋は陸の部屋だ。寝るときは圭吾と一緒に寝室で寝るのでこの部屋で寝たことは今まで一度もない。常夜灯に照らされた勉強机が目に入る。明日は英語の勉強をしておきたい。今はお金を貯めるときだけけれど、勉強は続けていたかった。やらなければあつと言う間に忘れてしまうから。

「大丈夫、一緒にいるよ」

奈央はぎゅうと陸の腕を抱きしめ離さない。

奈央には一体何があったのだろう。どうしてあげることができるのだろう。さすがにこれからもずっとここで、というわけにはいかない。

「ん」

眠かったのか、それとも体温に落ち着いたのか奈央はすぐに寝息を立てた。

(どうしたものかな)

圭吾と一緒に寝られなくて寂しい。けれど奈央も心配だった。

しばらく様子を見て、そつと腕を剥がして布団から抜け出す。リビングに通じるドアを開けると、圭吾がソファで本を読んでいた。

「ごめんなさい」

「いや、彼は寝たか？」

「はい」

「お疲れ様」

隣に座ると肩を引き寄せ頭頂部にキスをくれる。癒しのキス。

「一緒に寝れないの寂しい」

「ああ。だがきつと一人にしておいて途中で目が覚めたら心細くなるだろう」
その口ぶりから奈央の事情をすでに知っているのだと悟る。

「あの、奈央くんは……」

「ああ。どうやら知的障がいを抱えているらしい」

「……そうなんですか」

「知能は五歳前後のようだ」

「……そっか」

「欲しければやる、と言われたよ」

「えっ……何それ……ひどい」

「ああ。だが金を払えと言っていた」

耳を塞ぎたくなるような話だった。

「……僕明日の朝、市役所に相談に行つてきます」

「ああ……だが俺も一緒に行くよ。午前中は義之が来る予定がある。午後から行こう」

義之というのは圭吾の学生時代からの友人だ。家にも何度も遊びに来ているし、陸と圭吾の関係ももちろん知っている。義之自身バイセクシャルらしく偏見もないので陸も義之のことは大好きだった。

「義之さん、明日はどうして？」

仲が良いとはいえ、義之は多忙の身だった。

義之の家は代々続くヤクザの家だ。当然のように組を継ぐものとして育てられ、暴対法が厳しい今、通常ノシノギでは生きていけないと大学に入学。そこで圭吾と知り合い意気投合したという。

圭吾も偏見はないので友人として付き合い合っていたが、お互い大学を卒業し、圭吾は塾に就職、義之はヤクザへの登録をしたところで付き合いは水面下で行われるようになった。それは義之からの提案だったらしい。むしろ今後友人関係が続けたければそれを受け入れると、普通とは逆の脅しを受けたのだ、と圭吾は笑っていた。

ヤクザとして育ちながらも、周りからヤクザがどう見られているのかもしれないと学んでいた義之は、自分が友人でいることで圭吾に不利益をこうむらせることが嫌だったのだ。

だから今、義之と会うときは大抵朝の早い時間に義之がやってくる。それにこのマンションには義之も部屋を持っている——住んではないが——というから驚きだった。しかしそれならこのマンションに入りをしていても怪しまれない、というのが理屈らしい。

実際には学生時代から仲が良かったのを級友たちは皆知っているらしいので、それがカモフラージュになるかどうかはよく分からないけれど。

翌朝、奈央は昨夜よりも更に陸にべつたりになった。圭吾が話しかけてもビクビク怯えながら陸の背後に隠れてしまう。座るときも常に陸の隣。陸には笑顔を見せ、穏やかな表情を浮かべていた。

食後のコーヒー——奈央はココア——を飲んでいるとインターフォンが鳴った。圭吾が立ち上がり対応する。義之だった。

「お邪魔します」

「おはようございます」

圭吾と共にリビングに入った義之に挨拶をする。立ち上がろうと思ったけれど、奈央がそれを邪魔したのだ。しかし義之はそれ無礼とは思わないタイプの人間だった。器がでかい。

「あれ、はじめまして」

もしかしたら義之は昨夜のうちに圭吾から事情を聞いていたのかもしれない。戸惑う様子もなく奈央に話しかける。

「……おはよう」

奈央が返事を返した。圭吾には返さないのに。驚いたのはそれだけではなかった。継り付くように抱きしめていた陸の腕を離したのだ。

「……おいで」

義之が声を掛けると、その瞬間、奈央は義之に走り寄った。そして初対面とは思えない勢いで身体に抱きついたので。

「可愛いな」

義之は嬉しそうに奈央の頭を撫でる。奈央も嬉しそうに笑顔を見せた。

その様子に安心したらしい圭吾がキッチンに向かった。義之の分のコーヒーだろう。義之は圭吾の客なのだから本当は陸がすべきなのだが、奈央が懐いている陸は席を立たない方がいいと判断したのだ。

目で礼を言う。圭吾は大丈夫という表情を見せた。

「お名前は？」

「奈央」

「そうか。奈央か。俺は義之だよ」

「義之？」

「そう。よろしくな」

「うん」

無邪気な笑顔。どうやら今度は義之に甘えることにしたようだ。少し寂しいと思いつつ、これでまた圭吾に触れられる、と頭を切り替えた。

圭吾も同じことを思ったのか、テーブルにコーヒーを置くと陸の隣に腰を下ろした。

「奈央、痛いよ」

奈央が隣に座る圭吾の左腕をぎゅうと抱きしめる。まるで最愛の人をライバルから守ろうとしているかのような。誰一人義之に手を出すことはないのだけれど。

それにしても、痛いと言いながら義之もまんざらでもなさそうだ。まだ内面は分からないものの、綺麗な奈央は義之の好みでもおかしくない。

しばらくそのまま雑談をしたけれど——今日は別に用事があって来たわけではなかったらしい——コーヒーを飲み終える頃圭吾が言った。

「陸、ちょっと奈央を」

「はい」

きつと大事な話があるのだろう。立ち上がり、奈央に手を差し伸べる。

「奈央くん、あつちで一緒に遊ぼうか」

「やー」

「奈央くん、お菓子がああるよ、食べる？」

「お菓子？」

「そう、クッキー食べようか」

「食べる」

最初は義之の腕に縋りついていた奈央が腰を上げた。クッキーに負けた義之が苦笑する。

「また後でな、奈央」

※ ※ ※

「……で、どういことだ」

昨夜の電話の説明は『繊細な男の子がいる』という簡潔なものだった。詳細が気になりはしたものの、事情のある生徒を預かっているのだろう程度に思っていたのだが、どうやらそんな簡単な話でもないようだった。

「昨日のバイトからの帰り、陸が拾ってきた」

「拾ったって、犬ネコじゃねえんだから」

「俺だってそう思ったけどさ、あんな様子見ていたら返してきなさいとも言えないよ」

圭吾が苦笑する。確かに気持ちは分かった。

「で、奈央くんが家の電話番号が書かれた紙を持っていたから電話して事情を話したんだよ。そしたらいいから欲しければあげる、って」

「は？それこそ犬ネコ……よりひでえな」

「知的障がいがあるんだって。知能は五歳前後で止まってる」

「……そうなのか」

そうは見えなかった。とても素直で、綺麗な目をしているなど思ったのだ。きちんと受け答えもできるし、確かに話し方や言葉は幼いものの、知能に障がいがあるとは思えなかった。

「欲しければ、金だって」

「ほう。いくらだ」

「そこまでは言ってなかった」

「金を払えばくれるんだな」

「そうらしいよ」

圭吾がここまで話すということは、こちらの気持ちに気付いているということだ。

「電話番号を」

そう言うと、圭吾は十桁の番号を空で言ってみせた。さすが全国トップテンに入る人気講師だ。携帯を取り出しコールする。しばらく待つと不機嫌そうな寝ぼけ声が聞こえた。

「いくらほしい」

『はあ？ あんた誰』

「奈央だ。奈央と養子縁組をしたい」

『一千万』

名乗りもしない相手に対し、一瞬の迷いすらなく言い放った。恐らく慣れたやりとりなのだろう。奈央のあの可愛さだ。外に出れば欲しいという男はそれなりにいるだろう。

「わかった。住所を言え。時間は今日の十三時。印鑑を用意しておけ」

言うべきことを言うと、ふんという鼻息と共に通話は切れた。交渉成立だった。

「さすが」

「うちの強面に行かせるよ」

「だろうね」

悪いな、と一声かけて顧問弁護士に電話を入れる。あらましを話すだけで優秀な男は全て理解したようだった。礼を言って携帯をしまう。

「弁護士さん、何だって？」

「ああ、大丈夫だ。全て任せておけばいい」

よかった、と圭吾は心からほっとした様子で息を吐いた。

「それにしても、陸が人間を拾ってくるとは」

「俺も驚いたよ。帰りが遅いなとは思っていたんだけど」

~~~~~

「その後奈央さんはいかがですか」

医者 of 定期観察。一か月ぶりに来たが、どうやらその質問の裏には奈央との関係を含めているように思えた。

「順調だ。少し我儘が出てきたと報告が来ているが」

「それは健全な成長でしょう」

「報告してきた奴もそう言って嬉しそうにしていたよ」

我儘を言われて喜ぶなんて、と普通は思うところだけれど、奈央は子供と変わらないのだ。赤ん坊から少しずつやり直して、これからゆっくり大人になっていけばいい。

「体調についてはいかがですか」

「相変わらずオムツは外れていないが、少しずつふっくらしてきたし髪の毛も良くなった」

来たときはガリガリで骨が浮いていた。けれどそれも少しずつ柔らかさを帯びるようになってきた。

「そうですね。……奈央さんは確か真性包茎だったと思いますか」

奈央が来たときに全身を診ているので記憶に残っていたのだろう。確かにそこは義之としても気になる場所だったが。

「手術にはまだ耐えられないだろう」

包茎手術については調べてあった。しかし部分麻酔なのだ。意識がある。訳を話せば全身麻酔でしてくれるだろうが、それでも今の奈央には無理そうだった。病院に行き、検査を受け、麻酔をして、起きたら痛みがある——やはり無理だ。きつと手術の必要性も理解できないだろう。

「そうですね、ですが衛生面……」

医者がそこまで言ったときだった。数メートル離れたところで組員とかるたをしていた奈央が大きな声で義之を呼んだ。

「義之！ おちんちん勃起した！」

そう言って走ってくる。組員も慣れたものなので気にした様子はなかったが、医者は違った。

「奈央さん！？」

「いいんだ」

何かを言おうとする医者を止め、奈央を近くに呼ぶ。

「どうしようか」

「かるたするからおちんちん治して！」

そう言っただけで奈央はズボンを下ろした。オムツが丸見えになる。オムツは義之が脱がせ、対面で膝に座らせた。

「ほら、掴まって」

「うん！」

首に腕を回させ、落ちないように腰を支える。そして皮の上からペニスを抜く。

「んっ、あっ」

身体が快感を覚えたのか、いつの間にか奈央は喘ぐことができるようになっていた。しかしこういう行為が本来は恥ずかしいこと、人に見せるものではないことは教えていない。だから誰がいようと気にすることなく快感を甘受していた。

「あっ、おちんちん気持ちいい」

「そうか。もう治りそうかな」

「うん、治るっ」

びゅく、とペニスから白濁が飛び出した。服が汚れないように手で覆うようにして受け止める。

「義之、ありがとう」

「どういたしまして」

義之の手が汚れていることに気付いた組員が近づいてきて奈央にオムツとズボンを穿かせ、手を繋いでかるたに戻って行く。

「……若」

「何だ」

手を洗いに行こうと席を立つが、医者に止められた。

「いつもこのように？」

「ああ。俺がいけないときは組員が抜いてやっている。包茎も可愛いだろう」

医者はもう何も言わなかった。

~~~~~

「あの……ここ？」

疑問を呈したのは陸だけだった。圭吾は合鍵を持つ仲だし、奈央は分かっていないのでそれは当然だった。

「俺の部屋なんだ。楽しいぞ」

からかうように言っただけで、陸は少し首を傾げた。付き合いが長いのに一度も呼んだことがなかったからかもしれない。

「ぶっぞ」

鍵を開けてやり、三人を先に中へ通す。鍵を閉めて、玄関で三人を追い越し誘導する。部屋の間取りは圭吾の部屋とほとんど変わらない。しかし圭吾の部屋より少し広い。

「……え……？　どこ……」

「電気もガスも水道も使えるよ。掃除もしてある。好きに使って構わない」

「え……え？」

陸の戸惑いは尤もだがここは圭吾の役目だ。

「陸。今日は奈央くんにえっちなことを教えてあげるんだよ」

「え？　奈央くんに？」

「そう。奈央くんは先日やっと射精ができるようになったんだって。でもそれしか分からないから、陸も奈央くんに教えてあげて」

「陸、僕に教えてくれるの？」

奈央は何のことか分かっていないはずなのに自分の名前が出たことで嬉しそうにしている。しかしその純粋な目に、陸は困惑している。子供のような奈央を無碍に扱うこともできないのだろう。

「奈央くん……」

「陸、何も深く考えることないよ。いつもみたいに陸が上手に気持ち良くなっているところを見せてあげればいいんだ」

「え、だって……」

恥ずかしそうに顔を染め、陸はちらりと義之を見た。

「陸、圭吾にどんな風に可愛がられているのか教えてくれ」

この様子なら大丈夫だと判断してキッチンに入った。もちろん圭吾がここに慣れているとバレないように「圭吾、こっちに来てくれ」と声を掛けて。

「ああ、そうだ奈央、あそこに大きなベッドがある。陸と一緒にコロコロしてごらん」

そう言うとな奈央は嬉しそうに頷き、陸の手首を持ってキングサイズのベッドにダイブした。スプリングが効いてぼよんぼよんと跳んでいる。その様子を見た陸も転がった。楽しそうだ。

「大丈夫そうだな」

「陸は見られたい願望がありそうだから」

ありそう、という言い方に引っかかる。

「本人が言ったわけじゃないのか」

「A V撮影に興味があったみたいだから、今度撮ってみようかって言ったことがあるんだ。けどそれには反応がイマイチだった」

「……オカズにされたいのか？」

「うん、多分ハメ撮りよりそっちの方が好みなんだと思う」

話しながら飲み物とつまみを用意する。受け身二人には先に甘いものでも食べさせてリラックスさせた方がいいかとも思ったが、どうやらベッドで遊ぶのが楽しそうなのでそのまま放っておく。

「奈央くん、お酒は？」

「いや、飲ませたことはない。むしろ最近ようやく俺と同じ味付けの物を食べるようになったくらいだ」
「え、そうなの？」

家に来てすぐは薄味で柔らかいものから食べさせた。義之の家に来る前にどんなものを食べていたかは分からなかったけれど、見るからに虐待を受けていただろうと分かるほどに痩せていたのだ。まともなものを食べさせてもらっていないことは明白だった。どうせ生活は全てやり直すのだから、食事だって幼児食からでもいいだろうとなったのだ。

「じゃあお酒はダメだね」

「どちらにしても酔わせる必要はない。陸は酒を入れた方がいいか」

「うーん、どうかな。なくてもいいけどもと思う」

元々願望があるにしても、やはり最初は戸惑う。もしくは戸惑って見せる。そういう趣味なのだと思う。元々願望があるのだから。だから少しだけでも酒が入った方がお互いやりやすいのだが、できれば酒の力を借りずに一歩踏み出す方がいい。記憶にもしつかり残るし、自分の意思で行為をしたと自覚させることができるからだ。

「ならジュースにしておこう」

自分たちの酒と二人分のフルーツジュースを持ってベッドに向かう。ベッドの横にはベッドの方を向いて一人掛けのソファが並んで二つ置かれている。その間にはそれほど大きくないテーブル。義之と圭吾のための鑑賞スペースだ。

「陸、奈央。ジュースだぞ」

「わあい」

「ありがとうございます」

奈央は何も分からず楽しんでいる。陸は奈央のテンションにつられて普段と変わらないほどリラックスしていた。

ベッドに向かって右側のソファに義之、左に圭吾が座り、その正面、ベッドに奈央と陸がそれぞれ腰かけた。

「奈央、奈央は最近覚えたことがあるんだよな」

「覚えたこと？」

場所が場所だけに普通に考えれば色事と分かるはずだが、奈央にはやはり分からなかったらしい。

「勃起、できるようにしたのだろうか？」

「うん！」

「えっ」

驚いた声を上げたのは当然陸だ。

「そうなの？」

そして奈央に問うている。

「うん！ 義之、勃起させて」

できるようになったことを陸に見せたいらしい。ジュースを持ったまま膝の上に乗ってきた。

「ほら、溢すぞ」

「うん」

グラスを受け取りテーブルに置く。それから顎を掴み、唾内を舌で擦ってやる、ほんの数秒で陸は身体を離れた。

「見て！」

そう言ってズボンとオムツを下ろした。

「わ……奈央くん、包茎なんだ……」

「ほうけい？」

奈央は初めて聞いた単語に首を傾げている。少し寂しそうなのはきっと勃起を褒められなかったからだろ。

「でもとっても上手に勃起できたね。すごいね奈央くん」

陸はすぐに奈央の表情の意味を察した。本当に心の優しい子だと思う。それに子供好きなのだ。

「うん！ 陸はちんちん勃起する？」

「えっ……」

本気で困っている様子の陸に助け舟を出したのは圭吾だった。

「陸、見せてあげたらいいよ」

「えっ」

助け舟、ではなかったかもしれない。けれど圭吾は気にせず続ける。

「奈央くん、陸のおちんちんは奈央くんのはちよつと形が違うんだよ」

「そうなの？ 見たい！ 陸、見せて！」

陸は恥ずかしそうにしながらこちらを見て、それから視線を圭吾に移し、そしてズボンに手を掛けた。

シャンパングラスを傾ける。今日は甘口にした。こんなに可愛い二人の絡みが見られるのだから、と甘いものが良かったのだ。

「陸、早く！」

ズボンは脱げたものの、ボクサーパンツはなかなか下ろすことができないようだった。けれどこの待つ時間も楽しい時間の一つだ。圭吾も足を組み、ゆったりと陸を見つめている。

「陸、奈央くんが待ってるよ」

その一言が背中を押した。陸がゆっくりと下着を足から抜いた。

「わ！ きれい！」

奈央の感想に疑問を抱いた。奈央にはペニスの形や色で綺麗かそうでないかなんて判断はできないからだ。

「綺麗？」

圭吾に視線をやると、圭吾が笑った。

「陸、義之に見せてあげて」

もう陸は戸惑いの声を上げることにはしなかった。ベッドから降りてゆっくりとこちらに歩いてくる。

そして真ん前に立つと、見やすいように下を向いたままのペニスを上に向けた。

「ほう……」

亀頭を完全に覆った皮。けれどその皮にはパールピアスが刺さっていた。

「貞操帯の代わりにしてるんだ」

そう言ったのは圭吾だった。

陸は目を瞑りながらもしっかりとピアスが見えるようにこちらに向けている。少しだけ身を屈め、近付いて見る。

なるほど、と思った。亀頭の先の余った皮をピアスで閉じているから勃起ができないのだ。無理に勃起をすれば皮が裂けるが、その前に痛みで萎えるだろう。上手く考えたものだなどと感心する。

「排泄はどうしてるんだ？」

質問は陸に投げた。軽い責めに、圭吾も止めるようなことはしない。

「……家にいるときは圭吾さんに外してもらって、一人のときは自分で外します……」

「面倒じゃないのか？」

恋人からもらっただろうピアスを面倒と思うことはないだろう。だからわざと訊いた。

「……面倒じゃないです……トイレに行く度にドキドキします……」

「今はドキドキしてないのか？」

「してます……けど、勃起したら痛いから……」

素直だな、と思った。この部屋に来たことも、セクシャルな話をしたことも初めてだというのにやけに順応性が高い。これも圭吾の躰の成果なのか。

「勃起したくないのか」

「したい……」

「最後にいつした？」

奈央が横に来て、陸の手を握った。触れたかったのか応援しているのか。多分交ぜてほしかったのだろう。けれど陸は握り返すだけに留めて回答した。

「一か月くらい前です……」

「圭吾は鬼畜だな」

そう言って笑って圭吾を見る。圭吾も笑っていた。

~~~~~

圭吾と二人でそれぞれ相手のアナルを解す。四つん這いで目の前に並ぶ二つの尻。二人は服も全て脱いでいる。絶景だった。

「奈央くんのはやっぱりまだピンクだね」

「陸は使いこまれてる感じがするな」

色ではなく、柔らかさそうだと思ったのだ。けれど敢えてそこまでは言わない。

「っ、や、義之さん……」

顔を振る。けれど陸は逃げようとはしない。きちんと圭吾にアナルを曝したままだ。

「陸は何でも上手に啜えるから」

「何でも？ 例えば？」

「最近はお卵かな」

「陸、卵好きなの？ 僕も好き」

奈央が口を挟み、陸が戸惑った声を上げた。

「奈央くん……」

そんな二人の様子に圭吾が笑う。

「そっか、奈央くんは卵が好きなんだね。今度義之に食べさせてもらおうといいよ」

「僕毎日食べてるよ」

口から、普通に食事として、だけれど。

「僕甘いのが好き」

奈央はアナルを弄られているというのに気にする素振りがない。確かにただ機械的に慣らしているだけで感じさせようとしているわけではないけれど、不快感もないのだろうか。

「奈央、お尻痛くないか」

「うん」

「気持ち悪くないか」

「うん」

そんなものだろうか、と思ったけれど、そういえば奈央は未だにオムツに排泄しているのだ。尻を見られることには慣れているし、排便をすれば拭いてもらっている。風呂で身体だって洗ってもらっているから本来なら他人が触れるはずのない場所でも違和感を覚えないのだろうか。

ぐずられるようなことがなくてよかった、と思いつつながらアナルを抜げる。慣れた奈央はすでに挿入もできそうな程抜がっていたが、二人は奈央を待っていてくれたようだった。

「……ホースなら入るだろう」

「急がなくていいよ。初めてなんだからゆっくりで」

「陸がっらいだろう」

「……大丈夫です、お尻弄ってもらうの好きなので……」

急に素直になったな、と不思議に思うがそれはきっと圭吾に触れられているからだろう。受けは触られると素直になりやすくなる。

「そっか、じゃあもう少し待っていてくれ」

幸い奈央が嫌がることもなかったので、指が二本入るようになったところで指を引き抜いた。

「お待たせ」

この浴室には手が加えられている。本来は一つしかないはずのシャワーが二本あるのだ。もちろん、二人同時に使えるように、だ。

「義之、何するの？」

奈央が少し不安げに問うた。きっと後ろが見えないから怖くなってきたのだろう。

「奈央くん、大丈夫。今からお腹の中を綺麗にしてもらうんだよ。そしたらもっと気持ち良くしてもらえ

るよ。」

「お腹の中洗うの？」

二人が話している間にお湯の温度を確認し、シャワーヘッドを外したホースの先端に専用のノズルを付ける。それから水圧の確認をして、二人の心の準備を待った。

「そうだよ。でも義之さんがしてくれるから、奈央くんは何もしなくて大丈夫。手を繋いで頑張ろうね」

「うん」

まるで保育士のような、と思う。そういえば奈央は二年程フリーターで金を貯めて進学するのだと言っていた。その後の進路を聞いたことはなかったが、もしかしたら保育系なのかもしれない。それか圭吾のように教育系か。

二人が手を繋いで目を合わせているのを見て、ホースをアナルに入れた。

「わああああ！」

「奈央くん、大丈夫だよ。大丈夫だからゆっくり息をしようね」

さすが陸は慣れたものだ。湯の勢いは陸の方が強いのに奈央が落ち着けるようにと声をかけてくれる。しかし奈央は泣きそうだった。

「お腹壊れちゃうよお」

その言葉に湯を止める。圭吾もそれに倣った。

「義之さん、奈央くんもう出ちゃうかも」

「そうだな。陸も一緒に出してやってくれるか」

「え、こいびつ？」

このまま浴室で出すのかと思ったらしい。驚いた顔でこちらを振り向いた。

「違う。左を見る」

左。浴室の中——洗い場の隅に便器が二つ並んでいる。

「えっ！？」

「驚くことはないだろう。洗い場のあるユニットバスだと思えばいい」

シャワーカーテンはないが。

便座が二つ並んでいるのは、シャワーと同じく同時に使えるようにだ。もちろん浴室の外には普通のトイレもある。

「さあ、二人とも座って」

圭吾に促された二人がそれぞれ便座に座った。その前に立って見下ろす。

「出している」

「うん」

奈央はさっさと楽になりたかったようで、すぐにお湯を吐き出した。水音が響く。そして出し切ると「義之、全部出た！」と嬉しそうに報告をくれた。

しかし陸にはまだ羞恥心があった。

「や、出せないッ」



奈央と陸(受け同士)がキスして乳首弄りあってあんあん言っ、陸が奈央に入れたり(?)  
攻めと絡みながらもキスしたり乳首弄り合ったり……っというお話です。

約4万7千文字です。

宜しくお願い致します。

goneone